

## 佐賀県立博物館報 No.59

佐賀市内1丁目15番23号 TEL 0952(24)3947



## 売茶翁画像

伊藤若冲筆

(紙本墨画タテ二一・三・〇cmヨコ四四・五cm)

鶴巻衣つるまきえを着た売茶翁が天秤棒てんぺいぼうで茶具を担い橋を渡っている姿である。左上に「日々茶煙風裏駐 不勞回看白雲行 客得流水輕過去 買得誰知世上情 右売茶自詩 奉月海禪師 宗某」と書いた詩箋が張つてある。橋上に落款印章の「藤印如釣」「白文方印」「若冲居士」「朱文円印」がある。この絵は伊藤若冲筆である。

売茶翁(一六七五〜一七六三)はわが国の煎茶の道を開いた人で、はじめ僧名を月海元昭といい佐賀蓮池の竜津寺にて寺務をみていたが、のち大潮元皓が寺をつくにいたつて京に出、売茶を始めた。寛保二年(一七四二)名を高遊外と改め茶禅一味に徹して一生を終わつた。

若冲(一七一五〜一八〇〇)は翁より四〇歳程年下であるが、甚だ親交があり、翁の風貌をよくとらえた肖像画を多く描いている。

若冲が相国寺へ献納するために心血をそそいで描いた花卉鳥獸虫魚図三〇幅に翁は「丹青活手妙通神 宝曆庚辰冬至日 八十六翁高遊外書付 若冲隠士」と評語を書いて与えた。

これはのち絵とともに宮中に献納され、御物となっている。

## 目次

- 伊藤若冲筆・売茶翁画像…………… 1
- 「売茶翁展」開催要項…………… 2
- 「売茶翁展」略年譜…………… 2～3
- 作品紹介…………… 4～5
- 資料紹介・木造地藏菩薩半跏像…………… 6～8

## 「売茶翁展」開催要項

展覧会名称 一禅と茶のころ—売茶翁展

### 主 旨

売茶翁〔延宝3年(1675)～宝曆13年(1763)〕は茶禅一味に徹して一生を終わらせた禅僧で、月海元昭、のちの高徒外である。従来の抹茶ではなく、はじめて煎茶を煮て、それを人々に売り、茶も禅もその極意は一つであると説いた。翁が茶を売る奇異な姿を見て、誰いうとなく売茶翁といい、翁もまた自ら売茶翁といった。

今の煎茶道は翁の煎茶の煮方を基として成立したもので、翁の茶具は煎茶道具の模範的原形となった。煎茶人でもあった上田秋成・田能村竹田・富岡鉄斎などは好んで翁の茶具を模倣し、また若冲・大雅・文晁・華山・玉堂・竹田・鉄斎をはじめ多くの文人画家が翁の肖像を描いている。茶書のほとんどは翁の言動を載せ、随筆・伝記類にも書かれ、伴蒿蹊の「近世時人伝」などは最も多くの頁をさいて翁の伝を取っている。また翁を追慕して売茶翁と称した僧もあり、翁の行動をまねて売茶翁にならんとした医者、売酒郎となった画家などもあった。このように有形無形に翁の言動と精神は耳目をひき、敬い慕われた。

この売茶翁が郷土佐賀の出身であることは一般に知られていない。当館では売茶翁研究家谷村為海氏のご協力により売茶翁展を開催し、改めて翁を顕彰し、日本文化史、特に煎茶道に及ぼした足跡を追求する。

主 催 佐賀県教育委員会 佐賀県立博物館

行 する。

会 場 佐賀県立博物館 (佐賀市内1-15-23)

展示概要 遺墨、尺牘、遺品等約120点

0952-24-3947

会 期 昭和58年3月1日～3月27日

(但し休館日 3月7日、14日、22日)

観覧料 大 人500円 (400円)

中高生250円 (150円)

中小生150円 (100円)

図 録 展示作品を中心とした「売茶翁」の図録を発

行する。

1. 売茶翁の時代と生涯

2. 売茶翁の墨跡、尺牘

3. 売茶翁の茶具、遺品

4. 売茶翁の後世への影響

● 文人画家が描いた売茶翁像

● 伝記、小説、随筆、詩集、

茶書、錦絵など

### 売茶翁略年譜

延宝3年(1675) 5月16日、佐賀蓮池城外の南、通称道庵(現佐賀市蓮池町字西名)で、芝山奎之進常名の三男として生まれる。幼名を菊泉という。奎之進は、蓮池初代藩主鍋島直澄に医をもって仕えた。

芝山家の祖は、長門毛利侯の臣であったが、外記次政の時に暇を請うて、伯耆の小形に引きこもって一生を終えた。その子半左衛門次忠(後に七右衛門と改名)の時に、伊予松山の加藤嘉明に仕え、藩主が会津に転封されたので従った。嘉明の子成明の時、没収されたので、一家は浪人となる。次忠には、五左衛門次綱と奎之進常名の二子があり、兄次綱は母方の草川を、弟の常名、即ち売茶翁の父が芝山を継ぐ。次綱は儒医として、正保元年(1644)磐城三春の秋田後季に仕えた。そして、明治の廃藩まで代々医師として、秋田侯に仕えた。

貞享3年(1686)、12歳の時、蓮池の西に接する東巨勢にいた隠元派の僧、化霖道龍について得度し、名を月海元昭と改める。

貞享4年(1687)、化霖が、その師独湛性堂禪師の六十の寿を祝うために、黄檗山万福寺に上るのに従い。独湛に、その才能の奇なるを賞められた。

元禄6年(1693)、蓮池二代藩主直之は、嫡子直富(同5年、23歳で死去)への菩提のために、東巨勢の小院跡に、宝寿山竜津寺を建て、化霖を開山とする。(寺は寛政

2年—1790—万福寺の末寺となる)

元禄9年(1696)、22歳の時、下痢をわずらい、悩み、いえないまま修業に江戸に向い、翌春、仙台に赴いて万寿寺の開山、月耕道徳の僧堂に入る。

元禄14年(1701)、27歳の春、月耕が寂したので仙台を去る。のち、曹洞、臨済二宗の高僧に参禅し、また、近江安養寺の龍慧慧寂に律学を修める。筑前の雷山に登り、麦こがし(はつたい)と水だけで、一夏90日の断食苦行をする。

元禄16年(1703)、29歳の時、化霖に侍して、再び黄檗山に登る。化霖より4年ばかり遅れて、蓮池に帰る。黄檗山では、高職につき、重用される。49歳の時、化霖寂す。法弟の大潮元皓が寺を継ぐまでの十数年の長い間、寺務をみなければならなかった。

享保8年(1723)、大潮が寺を継いだので、翌年、50歳の4月、寺を去って東に向う。

享保16年(1731)、57歳頃の秋、ようやく京都東山に住み、翁が志とする業託(業しみを塵外に託すること)の生活に入らんとする。それまでは、難波の天王寺村などにいたらしい。

享保19年(1734)、60歳の時、禅宗京都五山の一、相国寺の東傍に移り住む。

享保20年(1735)、61歳の時、東山鴨川水辺の第二橋畔に茶店「通仙亭」を開き、売茶の業を始める。折りある

毎に、近くの東福寺の通天橋畔や三十三間堂（蓮華王院）、大仏殿（方広寺）前、遠くは下賀茂の糺の森、東岩倉などの名勝旧跡に、茶具を担って茶を売った。これは、80歳で売茶の業をやめるまで続いた。人々は、奇異な姿を見て売茶翁と呼び、翁自らも売茶翁といった。

元文4年(1739)、65歳の時、2、3年住んだ第二橋畔を去り、三十三間堂と大仏殿との間に移る。この年の暮には、茶舗に客がなく、ついに某家に飯錢を乞う。

寛政元年(1741)、67歳の冬、佐賀藩の国法に従い、葛参りと生前の暇乞いをかかえて、郷里佐賀に帰る。この時、俳語一卷を携える。大潮は、「備に状態を極む」として賛を書く。

寛保2年(1742)、国法は、他国へ出る者は10年を限度とし、それを超える者は、帰国の上、更にその手続きを要した。翁は、この煩をまぬがれるために、京都在住の吉姫（龜池第三代藩主直稱の長女、日野大納言實時に嫁す）の従員という形式で、京都の藩邸に附籍することを請い、許される。3月、姓を高、名を遊外と改めて、竜津寺をあとにし、再び上京して、大仏殿の南に住む。

寛保3年(1743)、69歳の夏、茶舗を双ヶ丘に移したが、梅雨の季節で客がなく、米銭に困窮する。親友の龜田窮樂は直ちに救済した。翁は大層喜び、偈を作って感謝する。

延享元年(1744)、70歳の時、相国寺の子院、林光院に移り住む。子院慈雲庵には、特に親しい大典顕常がいる。大典は、詩文を宇野土新と大潮とに学ぶ。禪門第一の漢文学者で、著作も多く、碩学にも選ばれている。

寛延元年(1748)、74歳の時、梅尾高山寺の密弁に請われて、「梅山種茶譜畧」を著す。僅か7枚に過ぎないが、翁唯一の著作である。

宝暦4年(1754)、80歳の春、某人から、その寿の祝いに一組の印を贈られる。無文の心印で十分であるが、用いなかっただけに厚意に背くと、終生これのみ用いる。この年の10月初日、高齢となり、次第に体力も衰え、腰痛を覚え出したのか、茶具を担っての売茶をやめるために、聖徳院村に移り、固定の茶店「通仙亭」を開く。

宝暦5年(1755)、81歳の9月4日、多年愛用した仙篋（茶具を入れる担い炉籠につけた名）を決然と焼却し、有名な「仙篋焼却語」の一文を作る。以後は通仙亭の茶代と揮毫の礼物、布施などによって生活する。茶代や揮毫料などは、客の出すままにしたことは以前と変わりはない。ある年の暮、書を求める人も少なく、飯錢などを欠いたことがあり、その時、仲介を依頼した翁の枯淡な面目曬如たる同文の手紙を安田是謙と、伝右衛門とに出している。

口上

隠者道人杯と申者ハ世ヲ  
不貧者ニ御座候 此似隠者ハ  
物ホシガリニ而前方ハ茶ヲ

売り米代ニ仕候へ共只今者致老  
衰茶ヲ売ニ出候事も難 叶  
候得者人之墨跡ヲ頼候ヲ幸ニ  
致シ拙筆ヲ不顧書候而物ヲ  
モラヒ申候菓子ヤ茶杯具候  
人御座候へ共何程結構成  
茶葉ニテモヒグルサハ休ミ不  
申候免角米程之事ハ無御座候  
サラバト米計リニ而も澄ミ不申  
時々ハ味増汁モ無レバ不成老  
人之事ナレバ寒氣ニハ炭も  
入申候 扱又借賃貸大難ニて候  
左候得者金銀米錢程之好キ  
事ハ無御座候卑劣千万之  
隠者ニて無面目候へ共此通フ  
御心得墨頼候人ニハ御取次  
可被成候 扱貧者之望候人ニハ  
紙も有合候ヲ用ヒ書候而還可申候  
元より礼物杯と申候ハ皆而無  
用ニ而候 己上

高遊外

2月15日

伝右衛門様

宝暦13年(1763)、89歳の時、詩集「売茶翁俳語 附名公茶器銘」が刊行される。この年の5月頃から徐々に衰弱し、7月16日、大仏殿の南に涉って89歳で寂すともいわれる。一説には、岡崎の某氏宅で寂したともいわれる。

黄葉僧であった売茶翁は、黄葉の念仏禪を修したが、あきらまず次第に白隠禪に転じた。

墨跡には白隠慧鶴の「槐安国語」の語句からとったものが、特に多い。

また、湛堂について真言律を学んだが、戒律の思想が勃興した時で、その唱道者である安楽律の光謙、浄土律の靈澤、などと深く交わる。翁の俳語には、律の思想がある。

侍者の内、大用と無住の2人は、後に五山の一つである天竜寺に住寺した。しかも、大用は五住で観學（徳川時代、京都五山の内から学識ある僧を選び、朝鮮修文職に任じ、対島の以節庵に輪住せしめ、朝鮮との外交に当らしめる役で、選ばれることを非常に名譽とした）にも任じられている。

翁の墨跡、語句は心境を表わしたものが多く、筆は美しく整い、真面目で続け字がない。世人は尊び、特に、茶人の欲してやまないものである。

(この年譜は谷村為海氏の稿による)

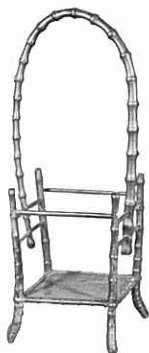


◀ 茶旗

(69.5×52.6)

売茶翁が茶店を開くときかかげた旗。

中央の文字は大典禪師、左右は桂洲禪師の書 翁の衣の布で作ったといわれる。



◀ 提炉台 (底左右15.0、奥行15.0、高41.5)

翁が涼炉をのせて運んだもの、底に「高遊外」の筆銘がある。



▲ 売茶翁茶具図 (部分)

翁が煎茶道具を入れていた担いご(俵窠)。81歳の時焼却した。翁と親交のあった木村兼殿堂 (1736~1802) の筆

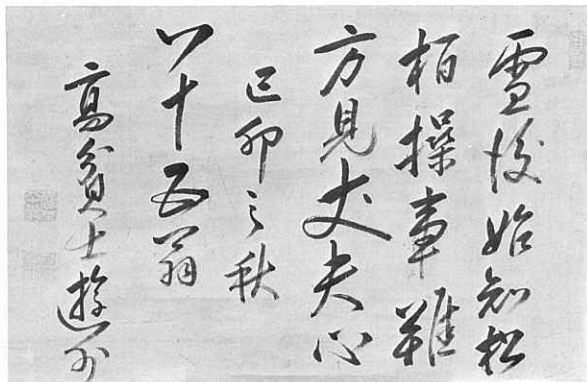


▲ 売茶翁画像 谷文晁筆亀田勘斎賛 (紙本淡彩 121.4×52.5)



▲ 寿 (18.0×23.5)

宝暦12年 (1762)、88歳正月3日の書

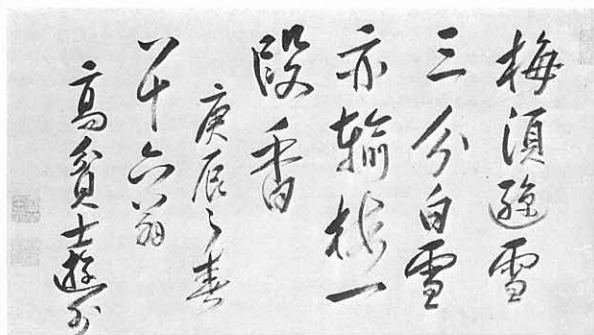


▲ 雪後始知云々 (27.0×40.8)

「虚堂和尚語録」にある句、虚堂は南宋の高僧。

雪後始めて知る  
松柏の操  
事難うして方に  
見る丈夫の心  
己卯の秋  
八十五翁  
高貧士遊外

雪後始知松  
栢操事難  
方見丈夫心  
己卯三秋  
八十五翁  
高貧士遊外



▲ 梅須遜雪三分白云々 (27.0×47.0)

「槐安国語」(白隠語録の評語)にある句。

梅は須らく  
雪に三分の白を  
遜るべし  
雪もまた梅に  
一段の香りを輸るべし  
庚辰の春  
八十六翁  
高貧士遊外

梅須遜雪  
三分白雪  
亦輸梅一  
段香  
庚辰の春  
八十六翁  
高貧士遊外



▲ 東山水上行 (132.0×28.0)

89歳時、翁が寂期を知って書き残したといわれる書。雲文文假禅師(五代の高僧)の語にある句。

## 資料紹介

### 木造地藏菩薩半跏像 小城郡小城町吉田 圓明寺蔵

法量	像高 124.3	坐高 87.8
	頭長 29.5	面長 21.0
	面幅 19.6	面奥 23.9
	肩幅 44.0	胸厚 27.5
	腹厚 30.0	肘張 62.6
	膝張 70.7	膝奥 53.0
	膝高(右) 15.1	(左) 13.7

(単位 cm)

天山山系に源をもつ祇園川が山を下り、嘉瀬川と合流して佐賀平野の中央部に有明海へと南流するが、圓明寺は、これが山地を抜け出て平野部に向かうところ、小城町北方の中世山城千葉城麓にある。宗派は天台宗である。寺には厨子深く安置された本尊地藏菩薩があるが、住職蒲原慶澄氏のご理解ご協力で調査の機会を得たので、その概要を紹介する。

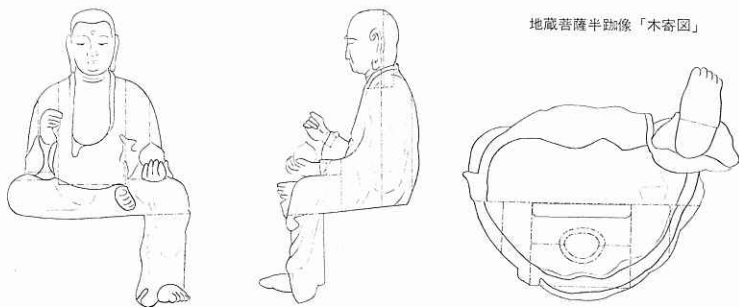
本像は右手の肘を折り前方に出して錫杖を軽く握り、左手は極く自然に左の膝頭の近くに置き、指を優しく曲げて宝珠を持ち、右足を屈げて坐し、左足を踏み下げて岩座上に坐る半跏像である。寺では延命地藏と伝えている。平安時代末期か鎌倉時代初期に成立したであろうと考えられている『仏説延命地藏菩薩經』には、延命地藏とは、**右膝曲立、臂掌承耳、左膝申下、手持錫杖**と説かれている。したがって右足は立膝にし、右手は膝の上に肘をつき手の掌を軽く頬に当て、足は垂下して半跏し、左手は屈臂して錫杖を握る姿勢を指しているのであろう。本像は左足を踏み下げたところが一致するものの、厳密に言えば先の経に説く姿態には当たらない。本像のように一般に左足を垂下したものを渾然と延命菩薩と呼んだのであろう。

#### 構造

本像の構造については「木寄図」の通りである。材はすべてヒノキ材を用いている。円頂の頭部は両耳の後ろで堅に矧ぎ、玉眼を入れ、後頭部頂も別材で矧ぐ。これに首柄を設け、背面の襟元から、前面は三道の下方を通る線で挿首にし、体部と接合する。胴部（膝前をはずしたかたちの胴）は、体側の中央を通って腹と背部を二分するように肩から地付きの線に矧目が走っており、前後矧ぎであることがわかる。さらに体幹部のうち、腹側に当たる前部は、胸から腹を構成する中心材と、その外側の肩さがりから左肘にかけて2材、右肘側2材、都合5材を矧ぎ合わせている。いっぽう背面は前部と同様の構造のほか、更に背面中央に1材が矧がれている。こうした構造の体部に、腹前で膝の部分構成する横材が接合する。次いで、腹前材と膝前の横材とは、両袖口を構成するのに両手の前腕部にかかる袖の部分に材が不足するので、この分、別に小材を矧ぐ。それに錫杖を執る右手先、宝珠を持つ左手先はそれぞれ1材で彫り出し袖口に挿し込んでいる。膝前は横に屈した右足と左足膝までを横1材であて、垂下する左足脛部とそれに懸る衣を堅1材、そして岩座に安ずる足の前半部を矧ぎつけている。胎内は太めのノミで荒い内削りがなされており、残る材は比較的厚手であるため像はがっしりしている。

#### 像の様式

髮際中央を緩めて大きく波うたせていることが目をひく。それに後頭部にも特徴がある。即ち、後頭部のふくらみが頭頂から襟元に向かう中間あたりにくぼみを入れ、首付きあたりの肉の豊隆した感じを表現しているのであろう。この表現は成功しておらず、重々しい印象を与える頭部になっている。面貌について見てみると、両眼の臉の見開きはさほど強くはない。上臉はやや波打つがほぼ水平で、下臉はやさしい弧線を描いて曲型的な伏し目をつくっている。眉も大きく弧を描いている。頬から頸にかけては丸味を帯び、肉付きのよい頬をつくっており、固く結んだ口元は面貌を引き締めて、高風秀麗な若々



地藏菩薩半跏像「木寄図」

しい相貌にしている。

次に体部について見てみると、肩・上膊あたりに肉をつけ、全体としてゆったりと落ち着いたまとまりのある構成をしめし、手の甲や指の肉どりも豊かにあらわされている。衲衣の衣文は、作者が最も意を注いで表現したものである。それは左肩から下がる袈裟の広がりや、膝の辺りでのよどみ、交叉し、反転する複雑な裳の構成であったであろう。背面の袈裟懸けの状況を含め裳にはごまかしがなく、左肩背後と左胸脇に襷を貼り、それに紐をつけて用いた様を写実的にみどとに表現している。その他の衣文についても、明快に、大き目の強い曲線を描いて流動させているが、この限りにおいては破綻がなく首尾一貫しており、鎌倉時代後期の作品としてはむしろ力強い作品である。だが、胸部から腹部にかけての肉身には張りがなく、胸元に見るU字形をつくる衲衣の処理や、全体から受ける衲衣のだぶついた印象、そして左足膝を経て垂れて足首に到る裳の襷の形状には、すでに鎌倉彫刻の盛期を過ぎた形式化の彫技が見てとれる。しかし、こうした欠点はあっても前述した秀麗な面だち、堂々とした全体のプロポーション、正確な袈裟の表現等に、作者の優れた技術が感じられ、この像が洗練された仏師の工房で制作されたものであることを推察させるのである。

#### 文様・彩色

本像の木肌に麻布を貼り、漆で整え、その上を彩色している。面部・胸の肉身部は金彩で、袈裟・褌には文様を配した頭初の彩色が残っている。即ち、左肩から右脇下へ懸る袈裟の帯状の区画「葉」には、金泥で緑どり・緑・朱・黒褐色で彩色された牡丹唐草文が連続して描かれており、「瓊」の部分には金泥細線の斜格子文で埋めている。いっぽう鶯色地の褌には、2この八鋒輪宝の間を三鉗杵で繋いだ文様が連続する。繋ぎの三鉗杵の両側には唐花文が添えてある。それに朱・丹・紺・緑・黄とみられる顔料を使い、中心から外方へ広がる渦状の波で円内を満した丸文が散らしてある。今、確認できる色は朱・緑と輪郭を描く金泥である。

#### 胎内銘

胎内一面に墨書銘がある。銘は筆跡によって本像造立に伴い記されたものと、後世追記されたものとの二次にわたっているものようである。本像製作に伴い書き付けられたと推定される造立銘は、胎内首柄直下から地着に到る背面と、腹部にある。荒く削り取った木面に書かれているので墨のりが悪く、判明し得ない文字が多い。

(背面)

\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_

常胤八代孫

胤貞

母義明意



▲ 木造地藏菩薩半跏像

生口力所建立也

\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_元徳元年千葉介  
圓明寺=安置

(腹前)

再興

□□国愛宕□  
大檀那千葉介常胤□

供養

大願□住持

追銘の分は後世（近世か）補修の折に記されたものと推定されるが、背面中央に当てられた背板と膝前材内側にある。いずれも同一人が書いたものと思われるが更に検討を要しよう。

(背板中央)

御腹中書付 趣軍火ニテ委細\_\_\_\_\_  
慈覚大師圓仁之正作愛宕山ニテ五\_\_\_\_\_

と読める。一方、膝前の銘は内刻りの形状で3区に分かれているようである。

(膝前)

\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_元□  
□都ニ移ル

## 北嶺ヨリ

(6)

九条江下

四月十六日 (日付は3行に書かれていたものを1行にした)

### 肥前州小城郡

#### 圓明寺

本尊トスル也

本尊元徳二年

十一月十三日甲 中

自博多箇崎

奉安置本堂

判読し得た銘は以上の通りであるが、この歴史的な解明は後考を期したい。

#### 結語

圓明寺の由緒・寺歴は、延享7年(1679)以降の住職以外は「由緒世代之傳一向相知不申候」とあり、つまびらかでない。いっぽう延暦22年(803) 聖心上人の創建を伝える小城町岩蔵の天台宗・古刹岩蔵寺の『岩蔵寺来由記』には、「以前当寺末寺タリト云ヘドモ寛保年中ヨリ叡山末寺相成ルノ分」として圓明寺が記載されている。したがって、寛保年中(1741~1744)以前に岩蔵寺末寺として存立していたものと推定される。また『北肥戦誌』には千葉胤朝の時、千葉氏は胤朝と彼の弟胤教を擁する2派に分かれて相戦い、文明元年(1469)11月14日、城下一円大火に包まれた際圓明寺も灰燼に帰したとある。いま、胎内銘により、これらの記録よりも古い鎌倉末期の元徳年間(1329~1331)に圓明寺の存在が明らかとなったのである。

さて、本像は幾度かの災禍の試練を経て霊像となった

のである。寛文5年(1665)に著された『肥前古跡縁起』によると「吉田の圓明寺本尊は仏師定朝が作、地藏菩薩の尊家名譽の霊仏也、其寺に又不動の尊像有り智證大師の御作也、或時火事出来し既に本殿に火かかりしを何く共なく僧一人山伏一人馳來り火焰の中へ飛入り思ふさまに火を消ける、諸人恠く思ひつくづく是を見る二僧は錫杖を持って虚空に飛去り、山伏は剣を提て焰と共に見え給はず、人々不思議の思をなし、爰かしこ見回りに後の山の上に本尊地藏菩薩並びに不動の尊像少しも燒させ給ひたる所もなく有難くこそ坐しける、其時彼の二人の像は地藏菩薩不動明王にて在しましけるよと、稀有の思をなし諸人愈信心をぞ催しける・・・」とある。仏像には寺の属する宗派の高僧、たとえば行基菩薩、弘法大師、伝教大師、慈覺大師、智證大師、恵心僧都の御作としたり、また有名仏師である定朝、運慶、快慶など名だたる仏師の名を付けて誇張し、霊仏として宗教的意義を高めている場合が多い。本像胎内の追銘中には慈覺大師の作とし、『肥前古跡縁起』には定朝の作と称えられている。ともあれ、本像は佐賀県下の仏像彫刻の中で、鎌倉時代後期に制作された中央の作風を示す優れた作例として貴重である。

小城の千葉氏は千葉常胤が頼朝から薩摩五郡とともに小城地頭職を賜って始まることされる。常胤八代孫胤貞に到る系図は次のとおりである。(徳嶋系図による)

常胤—胤胤—胤一—胤綱—胤綱—胤一—胤綱—胤宗—胤宗—胤胤貞 (建武3年11月29日卒去)

(企画普及係長 志佐禪彦)



地藏菩薩半跏像



背面



褙子の文様



膝前内刺の墨書銘

#### ※お知らせ

- 展覧会の会期が次のとおり変更になりました。
- 常設展「佐賀県の歴史と文化展」 3月1日(水)～3月31日(木)
  - 佐賀大学卒業制作展 3月9日(水)～3月13日(日)

博物館報	第59号
発行年月日	昭和58年1月10日
編集	野村綱明
発行	佐賀市内1丁目15-23 佐賀県立博物館
印刷	佐賀印刷社